

图52 第22号竖穴住居址及遗物出土状况（左一青铜器 右一土器坏）

## 第2節 造 器 物

### 1. 土器および陶器

各堅穴住居址から出土した土器類は、土師器を主体とし須恵器、若干の灰釉陶器がこれに伴っている。この共伴率は土師器57%に対し須恵器32%、灰釉陶器11%である。器形は土師器の甕・壺、須恵器の壺・瓶・鉢・壺、灰釉陶器の長頸壺・碗等が主体となる。この詳細は第五表に記載しているので一覧願いたい。

これらのうち土師器は国分式系統に所属するものであるが詳細に観察してみると二群に分けることができる。以下これを略述する。

#### 第 I 群

第6号址及第9号址出土。

##### イ) 土 師 器

甕が多く長めの鳥帽子形で最大巾は胴上部付近にあり、口縁の屈曲はくの字形に急に外反し口唇は丸味を帯び、底部は寛削りで時に木の葉の圧痕を持つものがある。また別に小形の甕で器壁極めて薄く4mm~6mm内外で全面に細くシャープな刷毛目が施された焼成堅緻な土器がある。次いで壺であるが器壁ややぶ厚く、口縁部やや内寄ぎみで底部は左廻りの糸切り底、内部を黒色研磨したものが多い。(図55、56)

##### ロ) 須 惠 器

A. 甕及び壺がある。須恵器の正統と諸玉もので焼成固く胎土が青色がかるものとやや褐色のものとがある。表面にたたき文が認められ自然釉が1部に強くかかっている。

B. 壺一点がある。(図53-2)口縁が直立に近く底部につけられており高台付で、全面に黒色が浅く付着しているが淡白色の生地で胎土の粒子は極めて細かい。いわゆる須恵系土師器の系列に入るものであろう。

##### ハ) 灰 釉 陶 器

長頸壺(図60-1)1点がある。全面に灰釉がかかり主体部は緑色に近いほど濃い。胎土はやや淡褐色で軟質である。猿投系窯の所産であり、黒窓7、8号窯製色に該当すると思われる。第6号址出土である。

#### 第II群土器

第I群とは概略的にみてさして大差はないが、微視的にみると若干の差を見出すことができるのと前項と比較してその特徴を述べる。

##### イ) 土 師 器

A. 大形の甕は少くなり、中形もしくは小形の甕がある。口縁部の屈曲がゆるやかになり、最大巾は胴部の中位に位置する。器壁表面に雲母が多い。壺は比較的多く口縁部がやや外反し、器壁やや厚く内部に黒色研磨で暗文のあるものが多い。底部は糸切り底で、1部に底部をやや厚くして高台風にしたものも見られる。(図53、54、59)

B. 第24号址出土の手捏土器壺2箇がある。(図62)

第5表 出土土師器、須恵器、陶器要目一覧表

住居 番号	國番 器器号	土番 器形	種別	法量 cm			色調	焼成	整 形		備 考
				口径	器高	厚さ			主 体 部	底 部	
第3号住居址	1	甕	II 土	—	—	0.7	淡褐色	中	—	—	欠
	53-10	坏	II須C	13.6	3.6	0.4	灰白色	中	ロクロ(左) ヘラナデ	糸切り	
	3	坏	II須	12.7	3.5	0.3	淡灰色	中	ロクロ ヘラナデ	糸切り	
	53-12	坏	II須	12.1	3.6	0.3	淡褐色	上	(外)ロクロ (内)ヘラナデ	糸切り	
	5	坏	II土A	—	3.5	0.5	淡褐色 (内黑)	下	ロクロナデ	糸切り	外面黑色部あり
	6	坏	II土A	14.0	4.0	0.5	淡褐色 (内黑)	下	(外)ロクロ (内)ナデ	糸切り	
	7	甕	II灰B	底部 7.2	—	0.3	褐色	上	—	高 台	施 磁
第5号住居址	8	坏	II須D	12.4	4.0	0.2	淡灰色	中	(外)ロクロ (内)ヘラナデ	糸切り	
	9	坏	II須D	14.0	3.8	0.3	灰白色	中	(外)ロクロ (内)ヘラナデ	糸切り	わずかに高台がつく
	10	坏	II土A	19.0	—	1.0	淡灰色	上	(表)ロクロ (裏)	糸切り	
	11	坏	II須B	—	—	0.5	褐灰色	上	(表)ロクロ (裏)	糸切り	
	12	甕	II土A	—	13.0	0.9	淡灰色	上	(外)ロクロ (内)ハケ目	糸切り	
	13	甕	II土A	—	—	1.0	淡褐色	中	(外)ロクロナデ (内)ロクロ	糸切り	
	14	甕	II土A	—	—	0.8	淡褐色	中	糸切りハケ目	糸切り	
	15	坏	II灰C	底 8.0	—	0.5	灰白色	上	(外)ロクロ (内)ナデ	高 台	高台付
第6号住居址	53-1	坏	I土A	13.4	4.4	0.5	淡褐色 (内黑)	下	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
	17	坏	I土A	12.5	3.0	0.5	淡褐色 (内黑)	下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	糸切り	
	18	坏	I土A	13.0	3.5	0.6	淡褐色 (内黑)	下	(外)ロクロナデ (内)	糸切り	
	19	坏	I土D	12.8	5.0	0.4	淡褐色 (内黑)	下	(外)ロクロナデ (内)	糸切り	
	53-6	坏	I須D	13.2	4.6	0.3	灰白色	中	(外)ロクロ (内)ナデ	糸切り	内面暗文
	21	甕	I土A	7.0	—	0.6	淡褐色	下	(外)ヘラ底形 (内)手づくね	欠	小形甕、輪びみ突あり
	22	甕	I土A	—	—	0.9	淡褐色	下	(外)ハケ目 (内)ヘラナデ	欠	外面に細いハケ目
	23	坏	I土D	—	—	0.4	淡褐色	中	(外)ナ テ (内)	欠	
	24	甕	I須A	約 40	3.5	1.1	淡青色	上	(外)タキ (内)ヘラナデ	欠	
	25	甕	I須	—	—	0.4	青褐色	中	(外)ナ テ	欠	短頸甕
第9号住居址	26	鉢	I須B	—	—	—	淡青色	上	(外)ロクロ (内)ロクロナデ	欠	
	60-1	甕	I灰A	口縁部 8.7	—	0.9	灰白色	上	(外)ロクロナデ (内)ロクロ	—	
	53-3	坏	I土A	13.0	4.2	0.4	淡褐色 (内黑)	下	ロクロナデ	—	外面部分的に黒色
	29	坏	I土A	15.5	6.0	0.4	淡褐色 (内黑)	下	(外)ロクロナデ	—	
	53-4	坏	須	—	—	—	淡灰色	中	(外)ロクロ (内)ロクロ	—	内外面に十字暗文
	53-2	坏	I須A	11.5	3.9	0.4	灰白色	中	(外)ロクロ (内)	—	
	56-3	甕	I土A	20.6	39	0.8	淡褐色	中	ロクロナデ	糸切り	エボシ影
	33	甕	I土A	15.0	—	0.5	淡褐色	中	ロクロ ヘラナデ	欠	エボシ影 高台付

第9号住居址	56-2	34	甕	I須 A	21.0	37.0	0.7	淡白色	下	ロクロナデ	木の葉	エボシ形
	56-1	35	甕	I土 A	23.0	40.0	0.7	淡褐色	上	ロクロヘラナデ	タタキ	エボシ形
	53-9	36	甕	I土 A	13.3	4.0	0.4	淡褐色 (内黒)	下	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
		37	甕	I土 A	16.0	5.5	0.4	淡褐色 (内黒)	下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	糸切り	
		38	甕	I土 A	17.0	4.8	0.4	褐 色 (内黒)	下	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
	53-7	39	甕	I須	12.0	3.5	0.4	灰青色	上	(外)ロクロ (内)ナデ	糸切り	
第22号住居址		40	甕	I須	13.5	3.5	0.3	灰白色	中	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
	53-8	41	甕	須	13.5	3.6	0.2	淡赤色	上	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
		42	甕	須	14.0	4.2	0.4	赤褐色	上	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
		43	甕	I須	—	—	0.4	灰青色	上	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
		44	甕	I須	14.0	3.3	0.4	灰青色	上	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	糸切り	
		45	甕	II土 D	14.0	3.5	0.3	淡赤色	中	(外)ロクロ (内)ナデ	糸切り	
		46	瓶	II須 B	—	—	0.7	暗青色	上	(外)ロクロ (内)ナデ	欠	頭部破片
		47	甕	II須 B	—	—	0.9	褐灰色	上	(外)タタキ目 (内)ナデ	欠	胴部破片
		48	甕	II須 B	—	—	0.5	灰青色	上	(外)タタキ目 (内)ナデ	欠	胴部破片
		49	鉢	II土 A	—	—	0.3	淡褐色	下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	欠	口縁部破片
		50	甕	II土 A	—	—	0.7	淡褐色	中	(外)ロクロナデ (内)ナデ	欠	薄手細線刷毛目
		51	瓶	II灰 C	—	—	0.7	灰白色	上	(外)水引きロクロ (内)ナデ	欠	胴部破片
		52	瓶	II灰 C	—	—	0.6	灰白色	上	(外)水引き (内)ロクロ	欠	底部破片
第24号住居址	62-5	53	甕	II土 A	7.0	2.5	0.5	褐 (内黒)	下	手すくね	タタキ	小形手すくね
	63-14	54	甕	II土 A	14.3	3.0	0.4	淡褐色 (内黒)	下	(外)ロクロ(左) (内)ナデ	墨書き一字	
	53-11	55	甕	II土 A	14.0	4.9	0.4	淡褐色 (内黒)	下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	墨書き一字	
	53-13	56	甕	II土 A	13.7	4.0	0.5	暗褐色 (内黒)	下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	糸切り	外面も黒色多し
		57	甕	II土 A	14.0	4.2	0.4	淡褐色	下	(外)ロクロ (内)ナデ	糸切り	内面に暗文あり
		58	甕	II土 A	14.5	4.5	0.5	黑褐色	下	(外)ロクロ目 (内)ナデ	糸切り	
		59	甕	II土 A	15.0	4.3	0.4	淡褐色	下	(外)ロクロ水引き (内)ナデ	糸切り	
		60	甕	II土 A	—	—	0.4	淡褐色	下	(外)ロクロ水引き (内)ナデ	欠	口縁部破片
		61	甕	II須	—	—	0.4	灰白色	下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	欠	口縁部破片
	60-2	62	甕	II灰 C	19.2	5.8	0.4	白灰色	上	(外)ロクロナデ (内)ナデ	高台	
第8号住居址		63	碗	II灰 C	19.2	5.8	0.4	白灰色	上	(外)ロクロナデ (内)ナデ	高台	口縁部を欠く
		64	鉢	II灰 C	—	—	0.3	白灰色	上	外内 ロクロ	欠	口縁部のみ
	60-4	65	碗	II土 A	7.4	2.5	0.9	淡褐色 (内黒)	下	手すくね	欠	
第8号住居址		66	甕	II土 A	—	—	0.7	褐 色	中	(外)輪穂み (内)ナデ	欠	内面に輪積み痕あり
		67	甕	II土	—	—	0.3	褐 色	中	(外)ヘラ目 (内)ナデ	欠	外面細線刷毛目あり

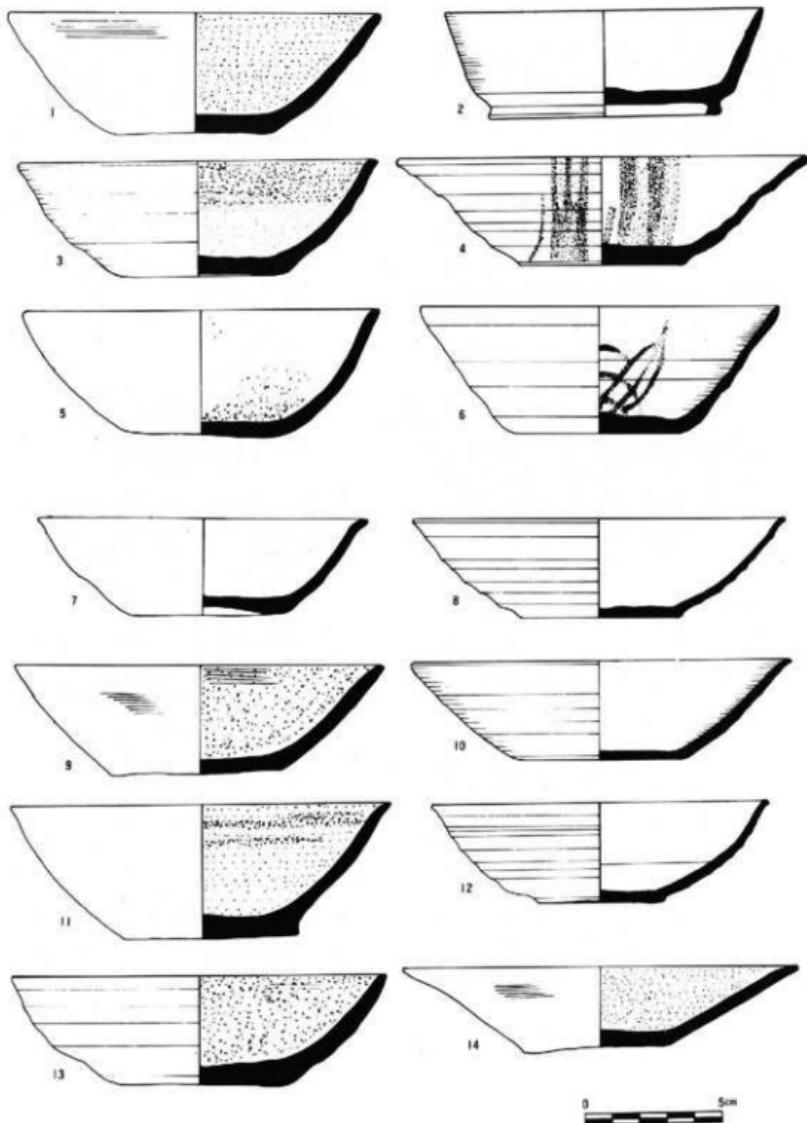


図53 出土土器実測図(1) (2～12は須恵器、他は土器)



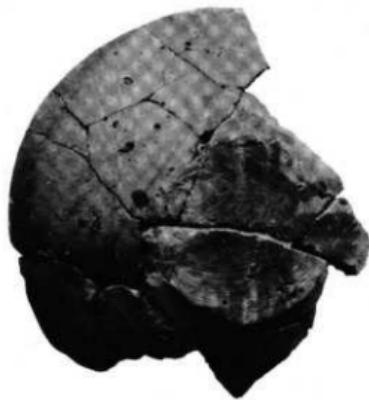
図54 出土土器、須恵器写真(1)



12



13



14

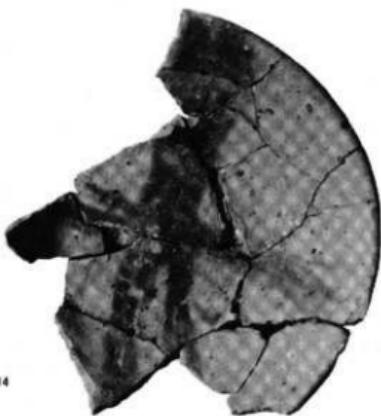


図55 出土土器 (2)

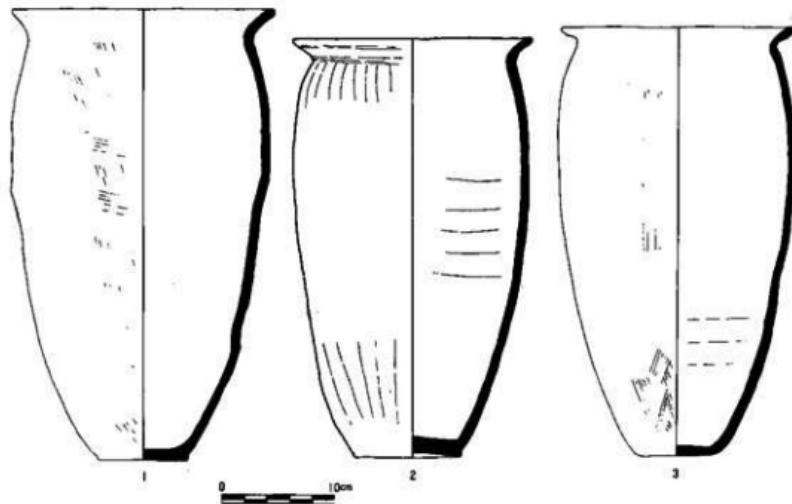


図56 出土土師器実測図(2)

#### ロ) 須恵器

胎土、焼成により3種に分類できる。

A. 中形の長頸壺で器壁全体に薄く胎土は褐色、器面黒青色で表面淡い銀色を呈し極めて堅く焼成されている。壺蓋1点は、器高やや高く、口縁の折りが直角に近く薄い。胎土は淡褐色でロクロ整形痕が顕著に認められる。他に薄手で暗青色を呈した壺口縁部1点がある。

B. 壺で胎土白色に近く、焼成やや歎かく暗青または紐痕の印されたものが多い。

(図53、54) 第1群Bとほとんど同様である。

C. 壺で、薄手堅緻に焼成されロクロ整形痕がシャープに並列している。糸切底で胎土が明褐色で器面も同調の明赤色を呈するのが特徴的である。第1群B、Cと共に須恵系土師器の系列を汲むものであろうか。

#### ハ) 灰釉陶器

高台付のやや大形に近い壺2点である。(図60)薄手堅緻で灰釉が前面に施され色調は明るく光沢を帯び、胎土は極めて緻密で白色を呈する。東濃の中津川窯製品と認められK90期と比定される。同様のもの2点か祭祀遺物に共伴した。

#### (付) 陶製大型壺 (図58)

発掘調査終了1ヶ月後、調査地点より西方200mの地点においてアルトーザによる削土が行われ



圖57 上一陶製大壺 下一鐵製品

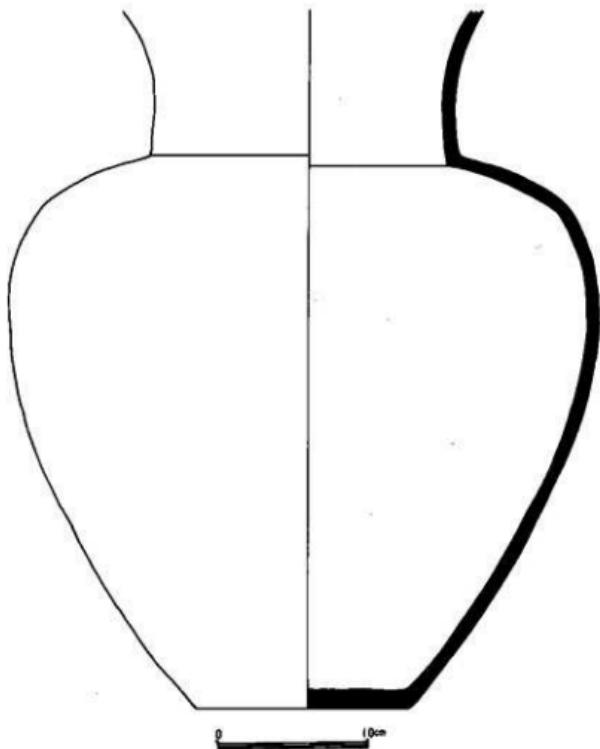


図58 陶製壺実測図（高45cm、胸径38cm、口径24cm、底径14cm）

た瓦、配石、灰などと共に出土し採集された遺物である。破片となって出土したが採集後に復元したところ、口縁部を全面欠失しているが、現高45cm、口縁部径24cm内外、胴部最大巾38cm、底径14cmを測る大形の壺となった。

器面は全体に青みがかった淡灰色の釉が施されているが部分的に褐色がかった色調も見られる。最大巾は肩からややさがった位置にあり、肩部から胴下部にかけて整形時に叩き縮めた圧痕が浅く残っている。胎土は褐色で極めて緻密で固く焼成されている。これらの点からみて灰釉陶とは異なる陶器であるが器形は須恵器の伝統を引いている点が認められ、極く初期の陶窯で焼成されたものと認められる。或は渥美半島における製品といわゆる渥美焼に類したものと見ることができる。恐らく平安末期もしくは鎌倉初期の住居址が存在しこれに伴ったものであろうが、工事中における発見のため、精査でき得なかったのは誠に残念なことである。（林 茂樹）



图59 出土祭祀遗物 21 石模凹版 19-20 环墨者部分 15 反釉碗 16 青铜制盆 17-18 手扫土师器

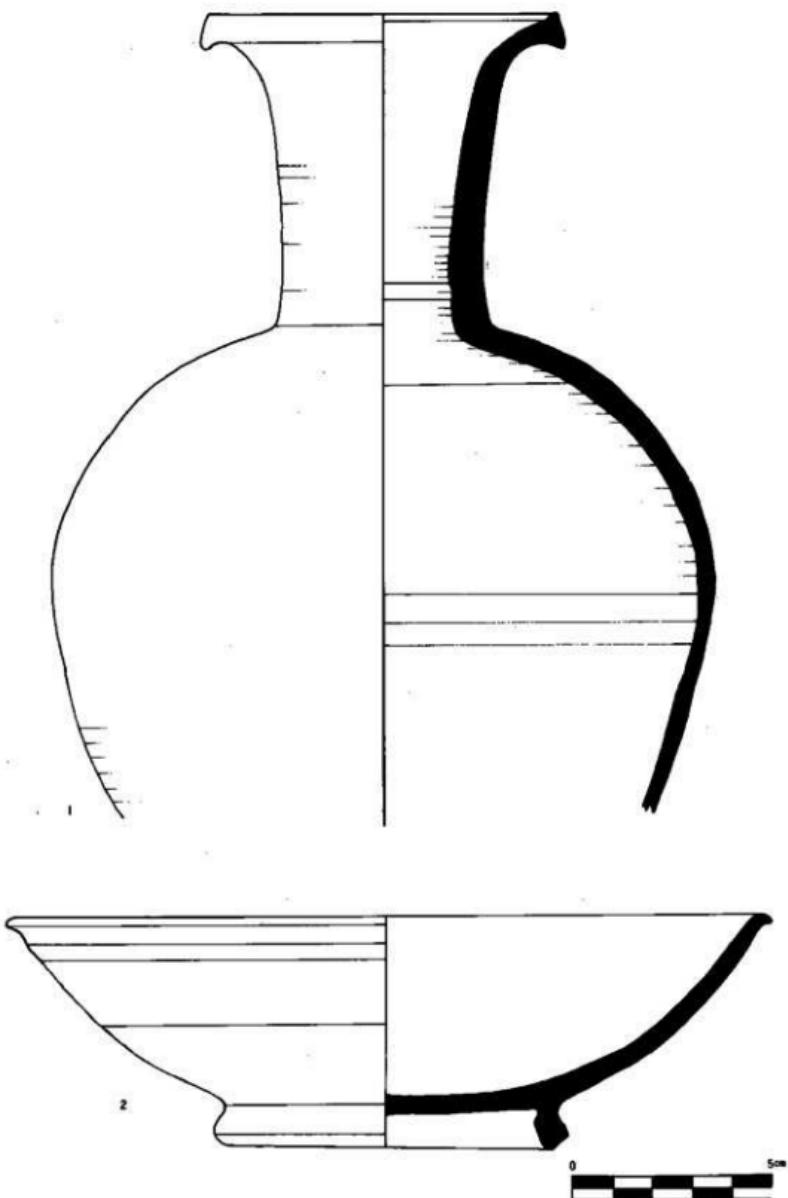


図60 出土灰釉陶器実測図(3)

1. 金 属 器

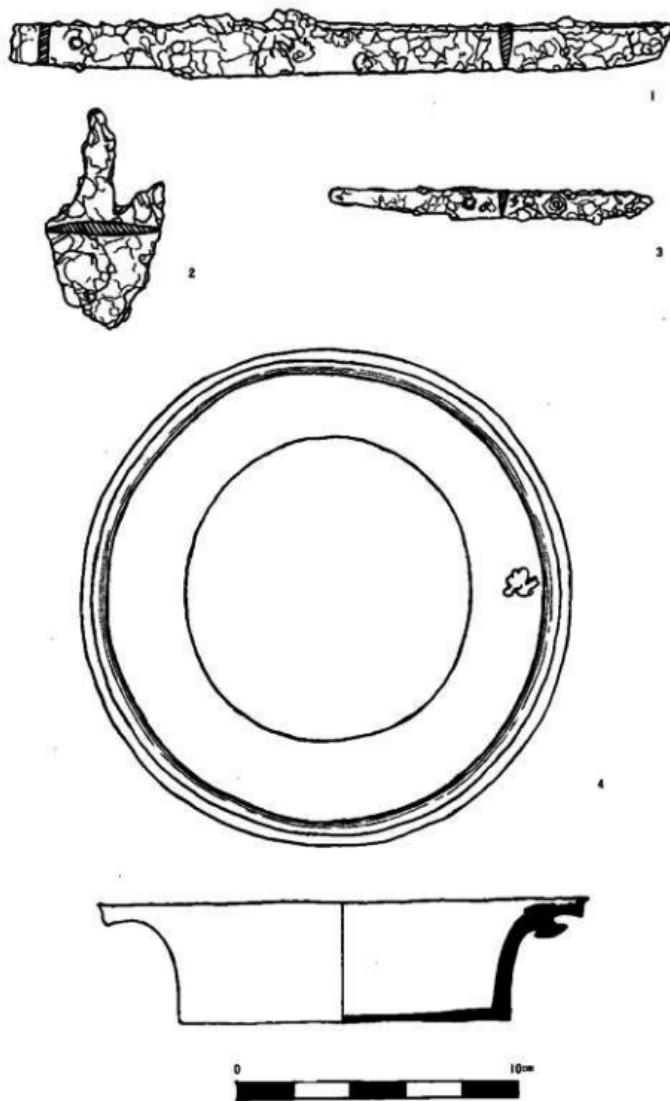


图61 金属器实测图 (1·2·3—铁器 4—青铜器)

#### イ) 鉢型青銅器 (図61-4)

第22号竪穴址の北壁の床面から出土した青銅製盤で内径15.4cm、口縁が直角に高さ8mmほど立ちあがる鉢形を呈し底径12cm、高さ4.3cm、器壁の厚さ5mmを測る。胴部は底部から直角に立ちあがり、上部で急カーブで外反し口縁部を形成する。口縁部から内径部にかかる位置に鉄製鋸が1箇鋸めてある点や、底部が器壁薄くなり中央部に腐食状1穴が存在する点からみて器体中軸線に直角方向の柄部がとりつけられていたことが推定される。また底部表面が極めて滑らかに磨かれている点にも留意したい。なお共伴出土した金銅製花弁状板金はこの器の装飾品と考えられる。

#### ロ) 鉄製刀子 (図61-1、3)

刀子は2点である。1は長さ23.2cm、巾1.8cm、の平造鍛造の刀で先端の鎌部は巾1.2cm、関部の巾2.0cmを測り関から鎌に至るにしたがいやや細身で外返り形となる。棟の厚さ0.4cm、茎の厚さ0.4cm、長さ6cmを測り刃闊となっている。基部から2.4cmの箇所に目釘穴1孔(径0.3cm)が設けられている。第13号址北壁部出土。2は長さ13.8cm、巾1cmの平造小形刀子である。茎は長さ4.2cm、巾0.5cmを測るが目釘穴ではなく刃闊で、身にくらべて茎の比が多い。調理用ナイフであろうか。第3号址出土。

#### ハ) 鉄鎌 (図61-2)

第7号址から出土した鐵鎌が1点ある。全長7.6cm、茎の長さ3.6cmの有茎鎌で「腸くり」のかえりが強い平造りの三角形鎌であるが、破損及び腐食が甚しい。

#### 3. 石製品 (図59-21)

円盤形石製品2点で、いずれも板状に剥離した石を多角形にトリミングして、側縁を研磨し円形に整えたもので1は径4.8cm、厚さ1cm、2は径6.2cm、厚さ0.9cmを測る。1は24号址内部の配石遺構から手捏土師器(盃、坏)、灰陶陶器・墨書き土師器と共に出土した。これは祭祀の色彩が濃厚でありしたがって円盤形石器も祭祀用遺物と考えられる。古墳時代の有孔円盤石製品の系譜をもつものであろう。

(林 茂樹)

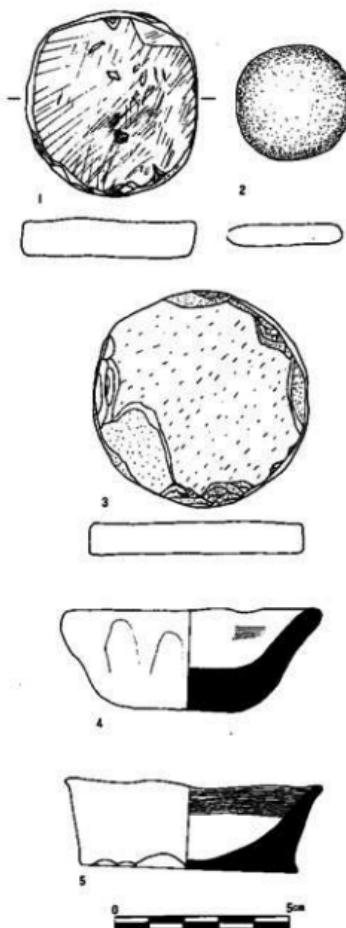


図62 祭祀用石製品及土製品実測図

## 第V章 中世の遺構・遺物

### 第1節 遺構

#### 1. 漆塗址 (図4)

当遺跡の所在する段丘突端の西部、北部を鍵の手状に掘り削った東西25m、南北50mの漆塗址で断面形は二段重ねのV字状を呈し、巾上部で5m、下底部で2mを測る。漆底部から白磁破片・常滑焼の陶片が出土し、漆の一部は弥生時代住居址を切っている点、室町時代の火葬墓群がこの漆の凹地斜面を利用している点などから室町時代以前の構築によるものと推定され、この段丘突端を城郭として利用した一時期のあったことを証明している。因みにこの漆塗に開まれた範囲内は、弥生・土師の竪穴址群であったがその上層に城郭に関係する遺物が存在したのであろうが、水田造築工事や、遺跡発掘除土を機械によったためなどにおいて散逸したと思われる。ただし第13号住居址と切り合って1辺1mの方形柱穴址が4箇、南北方向に一列に並んで出土したことである。この柱列に対応する崖突端は除土置場となつたために検出不能であったが、恐らくは小形の館もしくは櫓状建物の柱穴址ではなかったかと推定される。また漆塗に区切られた地域内は、弥生式及び平安時代の竪穴住居址が複合並列して出土したが、その上層覆土内から青磁・黒釉・常滑焼などの陶片が散発的に出土し、各所に炭化物層や敲土層が散見されたが水田構築により攪乱された層位であり検出は困難であった。

(林 茂樹)

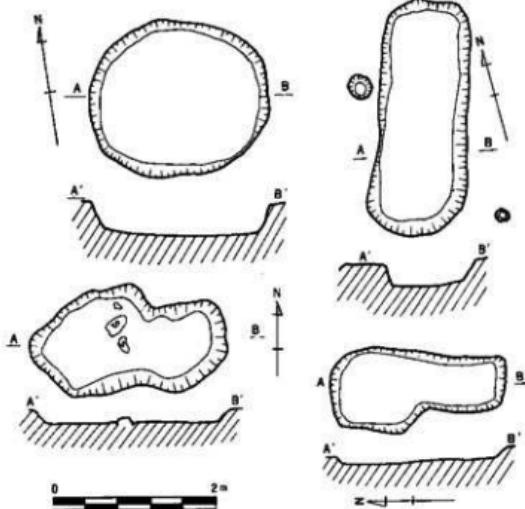


図63 中世土塙墓実測図

## 2. 土 壤 (図63、64)

発掘区の中央部東端に発見された土壙ニ号・口号・ト号・ル号の4基である。プランはニ号においては橢円形で長径2.16m、口号は長方形で長さ22.8m、巾60cm、ト号及ル号は長方形の変形で略同大、列葬品はト号址壙底から枕大の自然石2箇、口号からは壙底南部に宋錢5箇が存在した。これはまず、埋葬用土壙として考えてよからうと思われる。

## 3. 火葬土壙墓 (図65、66)

前項で述べた濠渠址の1部(北側濠)の自然埋没の凹地の斜面を利用して設けられた火葬用土壙20基(ワ号～フ号)がほぼ並列状態で検出された。そのうちツ号址及びネ号址を実測図(図65)で示したが、他のすべて同形同規模であった。

ツ号址を例にしてそのプラン構造を説明する。主体部の壙は限丸長方形プランで長さ110cm、巾45cm、深さはローム層を40cm穿っているので当時の地表から90cm内外と推定される。壙壁は90°に近い。主体部の斜面下側方向の中央部に長さ80cm、巾135cm内外の通風孔が直角に穿れていて全体平面形はT字形を呈する。床面には配石施設があり、ツ号址では径25cmの平石、ネ号址では10箇の拳大の石が配されていた。木棺と底面とに間隙の生ずることを計ったものであろうか。この配石の上下はいちじるしく焼土となりこれに包まれたように木炭・灰に混えて焼けて青白色に細片化した人骨が堆積状態で検出された。人骨量はほぼ一体分と認められる。また人骨に混つて焼けて酸化した古錢が3～5枚ぐらいづつ出土した。酸化が激しく文字判読不明のも

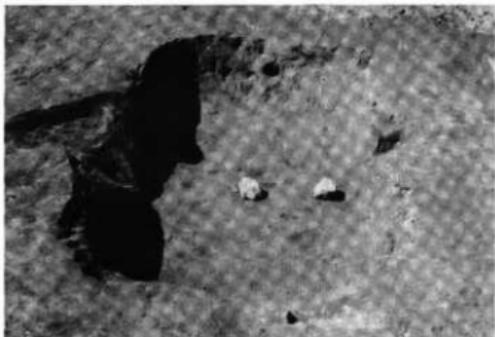
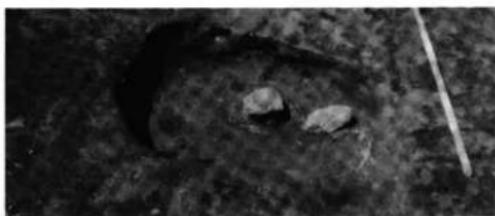


図64 中世土壙墓 (上一ツ号址 中一ヲ号址 下一リ号址)

のが多いが判読可能なものは永楽通宝6枚である。また一部の壙に黄瀬戸陶片・鉄軸天目茶碗破片  
が出土した。

(堀口貞幸・林 茂樹)

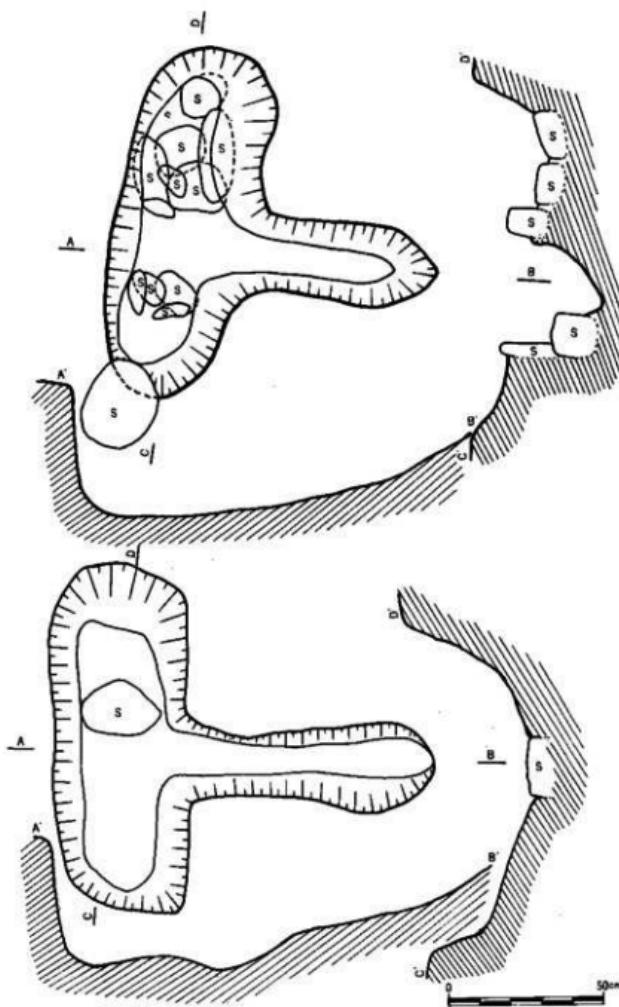


図65 中世火葬墓実測図

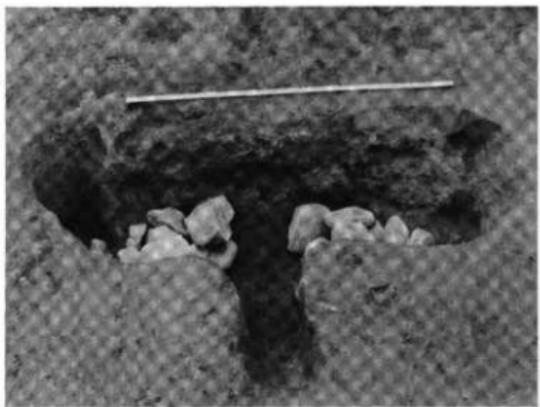


図66 中世火葬墓（上—ム・ソ・ナ・ラ号址 中—ツ号址 下—ソ・ナ号址 右—ネ号址）

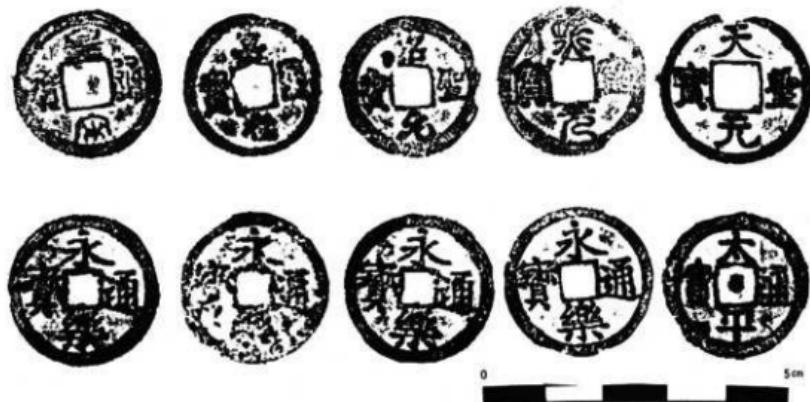


図67 墓出土宋銭拓影（上列一土塚墓出土 下列一火葬墓出土。太平通宝は土塚墓）

## 第2節 造 物

### 1. 古 銭 (図67、図68上)

土壤及び火葬墓から出土した古銭である。銭銘の判読可能なものの7種については図67に掲げた。土壤から出土した6種類は、いずれも北宋銭で铸造時期は太平通宝（976年～983年）から嘉祐通宝（1056年～1063年）に及ぶもので10世紀末から11世紀後半に至る間に中国から宋貿易によって招来されたものである。わが国で通用したのは少くとも11世紀から12世紀代でありその一部が埋葬時、宗教的慣習（旅銭）によって副葬されたものと解される。

火葬墓出土の13枚は、酸火がはげしく判読不明のものが多いが内6枚はすべて永樂通宝であるから他も同種の可能性が強い。铸造は明の成祖の時、永樂10年（1403年～1424年）であり明貿易によって輸入されたものであるから、使用時点は少くとも15世紀後半から16世紀前半と推定される。副葬の目的は土壤墓と同様なものと解され、納棺時に遺体に添えたものと思われる。

### 2. 古 陶 器 (図68下)

発掘区の全域にわたって第1層中から陶器破片が出土した。なお火葬墓にも若干件出した。図68下に掲げたものがそれであるが上左から常滑焼甕・古瀬戸碗・常滑長頸壺、下左から緑磁陶片・古瀬戸鉄釉碗・古瀬戸天目碗の破片である。いずれも知多・渥美半島古窯址群、瀬戸古窯址群等中世に巻起した古窯址群の製作に関わるもので、本遺跡における溝渠址及び火葬墓群等の時期を推測し得る資料である。

又図58に掲げた大形の壺は発掘調査終了後、発掘区の西方100mの地点においてブルトーザーによる削上中で発見され採取されたものである。頭部が太い大形の壺で器面は一見須恵器風の叩き目がつけられ、暗青色の施釉も薄く須恵器に似ているが胎土が紅灰色で明らかに渥美古窯址製品と思わ

れる陶器である。恐らく住居址内に置かれたものであろうが、工事中のため精査できなかったのは残念であった。製作年代は平安末期から鎌倉初期（12世紀～13世紀）の所産と推定される。その要目は主体部の最大巾38cm、現高45cm、口径24cmを測り、瀬美窯製品としては優品に属する古陶器であり、これを含んでいた住居址の性格に多大の問題を投げかけている。（林 茂樹）

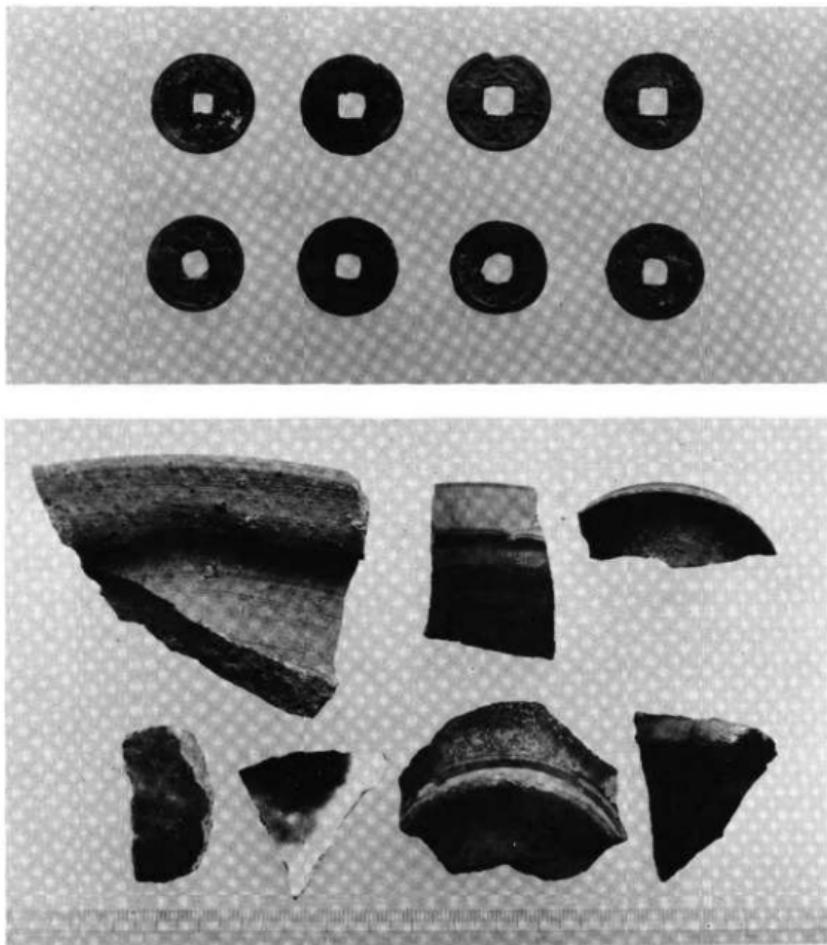


図68 中世の遺物（上—墓出土宋銭 下—古陶片）

## 第VI章 所 見

北城遺跡の東端部 2700m<sup>2</sup>を緊急発掘し、調査を加えてみた結果の詳細は前述のとおりであるが、調査を通じて得られた所見の二、三を記してみたい。

### 1. 弥生時代遺跡について

(1) まず竪穴式住居址についてであるが、プランは長方形もしくは矩形に近く、4柱穴で床面の2柱穴間に埋甕炉の施設をもっている点が通有であり、この点下伊那方面の後期住居址と共通性をもつものである。またなかに12号住居址の如く間敷切施設と思われる小ピット列の認められるものがあり、今後の同類住居址の集成により検討を加えねばならない課題であると思う。

(2) 土器形態は座光寺原式に類似するが、施文の特徴は櫛描波状文を密に重ねる成行ぶりを極めている点、北信箱清水式文化の影響を強く受けているように思える。この点、岡谷海戸遺跡、辰野町五反田遺跡の様相と同様で今後の追求が必要である。特に「北城」の位置はいわゆる中島式文化圏に包含されているが、後期前半期の様相はやや異っており下伊那文化圏とは、太田切川を境界として変化するかの如きである。伊那市貝沼遺跡の土器様相は、極めて「北城」に近く、今後上伊那南部方面の土器の精査が必要となるのである。

(3) 石器は極めて粗製の打製石斧のみで、この時期特有の有肩刃状石斧や磨製石包丁はほとんど出土していない。農耕生活の様式にかかる問題でにわかに即断はできないが、段丘直下の木下沖積面からもこの時期の土器が多数出土しており、筆者は農耕における住居の季節的移動を想定している。いわゆる「出作り小屋」の存在である。箕輪遺跡の精査が望まれるゆえんである。

(4) 他に類例を見ない石器に丸鑿形石斧がある。他の石器に比べ長大で重量のある石器で、恐らく丸木舟の製作工具と考えられる。

箕輪遺跡出土の丸木舟の検討も必要であるが、第18号住居址出土の石製碇も考慮に入れて考えねばならない。形態は太平洋型式であり、併せて類例の増加を待って考究したい。

### 2. 平安時代集落址について

2700m<sup>2</sup>内に平安期に属する竪穴住居址7基が検出されたが、表面調査によると西方 200mまでの範囲に存在したらしく、相当規模の大きい集落址とみなすことができる。発掘されたのはその東端部の1部にあたる。竪穴の規模プランは一辺 5m位の方形で一辺に石組の粘土製カマドが付設され、これに、土師器・須恵器・灰釉陶器が共伴しその比率は大旨 4 : 2 : 2 の割合である。最近発掘調査された大遺跡は当遺跡の近辺に多い。

即ち、中央道の中道遺跡及び堂地遺跡が北西 2km内にあり、天竜川の対岸に伊那市福島遺跡が存在する。本遺跡は、土師器編年の国分期のあるⅠ時期に所属する時点に求められるのであるが、中道Ⅱ、Ⅲ期及び福島遺跡と同時点に存在したものと考えられる。また塩尻市内田原集落址もほぼ同

時期と認められる。これらの大集落址との比較検討により当時の生活様式、生産構造、社会構造等が詳細に把握されるべきで今後の考究にまちたい。また延喜式に記載された「深沢駅」はほぼこの時期の成立で当地域に緊密な関係を有するものであり、その遺跡の把握は当遺跡の調査により、一步前進したと見てよいであろう。

次に出土土器類のうち「須恵器B類」とした灰白色薄手須恵器は、他の須恵器および灰釉陶器が他県地域おそらく濃尾平野などから移入されたものであるのに対し、B類は当地域産と見られ、その焼成、窯構造そして所在地等を探索する必要に迫られた。なお、共伴する土師器・須恵器・灰釉陶器の組み合せ状態は2期に分類されおよそ9世紀後半と11世紀前半と目されるのである。そしてこれを出土した竪穴住居址は9世紀後半のものは、柱穴が竪穴内に設けられているのに対し、11世紀のものは柱穴が竪穴内に認められることが少ないので差異があり、国分期編年の細分化が可能となった点を重要視したい。

次に祭祀遺構についてであるが集落の四至のひとつ、南端部に並列した2基の竪穴住居址の内部から伝統的な神道的様相を持つ遺物と、仏教的な様相をもつ遺物が、竪穴を異にしてそれぞれ出土したことである。第22号址は、青銅製香炉形容器と墨書き土師器を主体とし、第24号址は、アメノタクシリとよばれる手捏土器と墨書き土師器・灰釉陶器・石製円盤・土製紡錘車が配石址に伴出している。時期は共に11世紀前半である。この祭祀の様相に着目し平安期庶民の土俗信仰解明を今後進めていきたい。

### 3. 中世火葬墓について

中世漆原址の自然埋没した凹地斜面を利用して設けられた中世末の火葬墓20基以上が発見されたが、類例は最近数遺跡に亘って報告されている。当伊那地域では、伊那市中央道月見松遺跡4基、飯田市さつみ遺跡に7基、古屋垣外遺跡で14基、遠く中野市安源寺遺跡10基で、いずれも土壌内に不規則な配石を伴なっているがその当初の形態プランは余り明瞭ではない。月見松、さつみの2遺跡は平安末とされ後者は北宋錢を伴った。安源寺・古屋垣外は中世に属し、後者は陶片を伴っている。これにくらべ、本例は、明鏡・陶片を伴ない明らかに中世に属し、その形態はT字形で配石、通風孔の施設等が極めて当初の形で残っていたことは、これら火葬墳墓遺跡の典型としてよいであろう。これらの火葬墳墓の根元については、安源寺遺跡では浄土真宗の流布に係るものであるらしく、古屋敷遺跡でもその奥いが強い。本例においても安源寺に関係した土豪井上一族のもたらした葬法の疑いが大きい、この点も今後に解明しなければならない課題のひとつである。以上、北城発掘の結果もたらされた課題のいくつかを列記して今後の研究に備えようとしたものである。

(林 茂樹)

## 第VII章 おわりに

### — 箕輪町民のみなさんへ —

町の方針によって、北城遺跡のある土地に住宅団地が建設されることとなりましたので遺跡は記録保存として残されることとなり、その調査のための発掘がわずか2700m<sup>2</sup>のみでありますか実施された結果、20戸の住居址など各時代の遺構が出土しました。古代の集落は発掘された遺跡の何倍かもわからないくらい大きなものでしたが、未調査の地域はすべて破壊されてしまった以上今となっては、発掘されたようすをもとに想像するより仕方ありません。この報告書はいわば、北城遺跡を圧縮したダイジェスト版のようなものです。今まで全く無人の地と思われていた北城の地は、実はまことに由緒ぶかい土地であったことがわかつたのです。いまその大要を述べてみましょう。

この土地に人々の足跡がしるされたのは、およそ今から四千年前の縄文時代の中ごろであります。しかし彼らはここに住んだわけではなく、狩猟の場として、又は墓地を営む程度のさきやかなものであったようです。

今から二千年前、米つくりの文化が、南の濃尾平野に栄えやがてこの伊那谷にも天竜川をさかのぼって入ってきました。弥生時代がはじまるのであります。その最初のころの人々の墓地がここに営まれました。人々は恐らく木下駅の東側の天竜川の泥床を切り開いて稻作にいそしんでいたのであります。この集落は、稻作の豊かさをもととしてだんだんに人口も増え、家を作る場所もひろがって、二百年間にわたり発展してきました。そしてこの北城の高台に集落がつくられるようになったのは千八百年ほど前のころでした。ここには10数軒の家が立ち並び下の河原で米作をするばかりでなく、この段丘の家のまわりで畑作も行っていたようです。たて穴式の家は4本の柱に支えられ、奥の床には甕を埋めた炉がいちようにしつらえてあります。

その土器のもうように見られる文化のおもむきは、下伊那方面と善光寺平の両地域の栄えた文化の影響を受け、天竜川上流地帯獨特の文化をつくりあげていたようです。弥生時代が終りやがて古墳文化の時代となります。近畿地方を中心に勢力をほこった大和朝廷が国内を統一していくころ、この「北城」の地はふたたび無人の草地に変りました。奈良時代が終り、平安の都が京都に築かれたころ、9世紀になるとこの北城の高台に大きなムラがつくられてきます。平安の都「京都」を中心にして東北地方までのびた当時の高速道「東山道」が伊那谷を通過し箕輪の地に「深沢駅」が建設され人馬の往来がさかんになったり、東北のエゾ征伐の基地になったことも大きな原因であろうと思われるであります。「北城」につくられたムラはおよそ三百年間ほど栄えました。人々が使い残していった須恵器や灰釉陶器などには、東海地方や濃尾平野の文化の影響が強く表れていますし、青銅器や墨書きの字などには、京都の文化とのつながりが強く表されています。そしてこのムラは、中道、堂地遺跡や対岸福島遺跡にあったムラとはほぼ同じところにつくられたと考えられます。

次の鎌倉時代、つまり13世紀になりますとこの村の姿はまったく失われ、この地は墓地として使

われるようになります。そして暗黒時代といわれる南北朝時代にはここに堀をめぐらせた城館がつくられたようです。くわしいことはよくわかりませんが、武士たちの旗がひるがえっていた時期があるようです。「北城」というよびかたはこの時に始まったものと思われます。そしてどのように城が滅んだのか、やがて城跡も夏草に埋もれ深い堀もしだいに埋まっていったころ、それは戦国時代（16世紀末）とよばれるころですが、この堀のくぼみを利用して火葬をする墓がたくさんに作られます。亡き人々の昇天する煙りがいくたびかたちのぼったことでしょう。「引導場」という地名はこの時によばれたものでしょう。そして江戸時代になると自然の草原や森林となりやがて開墾されて畑として利用され、ふたたび無人の地となりはててしまったのです。

以上のべたように、少くとも四千年前から人間の足跡がつけられ、二千年ほど前に墓地として住宅地として使われてから、弥生・平安・南北朝と3回もかまどの種がたちのぼったのです。その間の時代は墓地として3回も使われたのです。いつの世にも変らない一家団らんの場である住宅、恋しくなつかしい人と永遠の別れを告げる墓地、このまったく相反する人間の営みの場として数百年のへだたりをもちながら6回の輪廻をくりかえしてきたこの「北城」の土地には言い難い人間生活の運命が秘められていたのであります。

終りにあたって、この発掘調査について計画された町長さんや教育長さん、発掘にご協力くださった多くの方々に対しまして、調査員を代表して厚く御礼を申しあげる次第であります。

（林 茂樹）

## 北城遺跡

～緊急発掘調査報告～

昭和52年3月30日 印刷

昭和52年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 小松総合印刷株